

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ケアの生態学に向けて〈共同研究： 心配と係り合いについての人類学的探求〉

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 真如 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009492">https://doi.org/10.15021/00009492</a>

# ケアの生態学に向けて

文・写真 西 真如

子育てや介助、癒やしや看護といった生活のさまざまな局面におけるケアの実践は、他者との出会いから生じる情動によって起動され、集合的な規範によって支持あるいは却下され、社会経済的的制度によって保障あるいは排除される一連の係り合いの文脈において把握することができる。私たちはどんな社会にも、その成員が必要とする庇護や治療を提供するための込み入った規範と制度とを見いだすことができる。しかし不確実な世界に生きる私たちは、それら規範によって支持される見込みのない心配や、制度的な保障を欠いた係り合いに常に巻き込まれている。本共同研究の目的は、情動と規範とのあいだに生起する係り合いの束が、ある種の秩序と反秩序に向かう政治的な過程を民族誌的記述のなかに捕捉すること、またそのための方法論の確立である。その方法は同時に、ケアに関する複合的な規範と制度、それらを結びつける諸エージェントの働きかけ、およびそこに動員される知識・技術・資源を、ある価値産出的な系、すなわち「ケアの生態系」として描き出すことを可能にするはずである。

## 心配と係り合いを出発点として

共同研究名にある「心配と係り合い」は、本共同研究の出発点を示している。メリアム・ウェブスター辞典の care の項目を引くと “a disquieted state of mixed uncertainty, apprehension, and responsibility” という少し古風で含意に富んだ定義が掲げられている (Merriam-Webster Dictionary)。これを日本語で言いかえてみたのが「心配と係り合い」である。「他者の必要を満たす実践」のようなより明晰で現代的な定義ではなく「心配と係り合い」を出発点とするのには理由がある。ケアの実践と社会の制度や規範との関係を扱った従来の研究においては、それらの実践が当該社会に所与の規範や価値をどのように実現しているか、あるいはその実現に失敗しているかが問題となることが多かった。それに対して本共同研究では、人びとが日常的に経験する心配や係り合いが、いかなる価値や秩序の産出に寄与しているのかを問うことが目的である。

たとえば育児という局面で考えてみよう。いくつかの社会では、特定の禁忌に触れた子は災いをもたらすとして、遺棄されねばならない。しかし同じ社会のなかに、遺棄された子を心配し、あえてその子の養育を引き受ける（つまり係り合いになる）人たちが現れる場合もあろう。その子の養育には

もちろん、さまざまな資源や関係が動員されることになる。そして禁忌に触れるはずの子の存在は、既存の社会秩序に介入し、その子が生きる価値とは何かという問いを人びとに突きつける。本共同研究では、心配と係り合いをとおして価値と秩序とが産出される過程、およびそこに動員される知識や資源の総体についての探求を「ケアの生態学」と呼ぶ。

## ベイトソンを経由して

ケアの生態学というアイデアは、グレゴリー・ベイトソンの影響を少なからず受けている。ベイトソンは主著『精神の生態学』において、意識と身体、社会と自然といった一切を包摂する環境に結びあわされた関係論的な自己を認識する方法を私たちに提示しようとした。私たちは、再帰的なコミュニケーションの過程によって世界と結びあわされている。自律的な意識の働きによって対象を認識し、自らの身体とそれを囲む環境を制御しようという試みは、最初から失敗している。ベイトソンのこれらの主張は、たとえばアルコール依存症と向きあう人たちの考察において、たいへん説得的に示されている (ベイトソン 2000)。アルコール依存者がしばしば禁酒に失敗するのは、意志の力で自らの身体を制御するのだという構えそのものが間違っているためである。人間にできるのは、自己の無力さを自覚し、アルコールを欲する自らの身体と和解することである。

ベイトソンの理論が並外れているのは、サイバネティクス理論を用いることで自然と社会とを包みこむ複雑で多様な相互作用系を把握し、そこに一貫した秩序を見いだそうとしたところにある。しかし彼の理論には、人間の主体性を単なる情報のやり取りのなかに解消してしまうように見えるところがある。かつてドゥルーズとガタリが、少なからずベイトソンの影響を受けながらも彼を強烈に批判したのは、彼の理論が結局のところ、人間性よりも資本の論理に奉仕するものになってしまうことを恐れたからである (Samuel 2002)。

ドゥルーズらが憂慮した問題は、現在の世界においてますます現実味を帯びている。たとえば現在のグローバルヘルスにおいては、対象人口中の疾病負荷をいかに効率的に低下させるかという問題に政策決定者の関心が収斂しており、人びとの病いの苦しみを取り除くという価値は、もはや顧みられないかに見える。グローバルな HIV 介入について言えば、その出発点は所得の低い国や地域の人びとに安価な治療薬を

## 西 真如 (にし まこと)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特定准教授。専門は医療人類学、アフリカ研究。編著書に『人間圏の再構築—熱帯社会の潜在力』（速水洋子・西真如・木村周平編 京都大学学術出版会 2012年）、論文に「あの虹の向こう—大阪市西成区の単身高齢者と世代・セクシャリティ・介護」森明子編『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』（ナカニシヤ出版 2019年）など。

届けることで、彼らの人生からエイズの苦しみを取り除くことではなかったか。ところが近年の HIV 介入は経済効率的に流行を管理することが目的となり、結果として治療薬だけでは解決しない身体的・社会的な困難を抱えた人びとの苦しみに対する無関心が蔓延している（西 2017）。

本共同研究のメンバーのフィールドは、「南の」世界と「北の」世界にまたがり、研究関心も対人的なケア関係に加えて、ケア実践を媒介する空間や物質へも向けられている。ケアの生態学は、いわゆる高福祉国家とそうでない国家とを隔てる差異や、地域ごとに異なる社会規範にとらわれることなく、

世界におけるケア実践の多様なあり方を分析・考察の対象とすることで、ケア実践に関する民族誌のスコープを大きくおしひろげようとする。この枠組みは、人類学者が医療や福祉といった制度的前提に閉じ込められることなく、「心」と「モノ」の垣根も取り払って、日常的な心配と係り合いの過程が産出する価値や秩序の総体としてのケアの生態系を記述することを可能にするはずである。



HIV 治療薬はアフリカの多くの場所で日常風景の一部となった。しかし薬では解決しない問題を抱え、人生の立て直しを果たせずにいる人たちも少なくない（2015年8月、エチオピア連邦民主共和国南部諸民族州グラゲ県）。

## ケアの生態学に向けて

以上のように考えるならば、ケアの生態学の課題は、多様なシステムとの相互作用のもとで形成される関係論的な自己を前提としながら、「心配と係り合い」をひとつの焦点とする人間の主体性を軸として、ケアの価値が産出される過程を描きだすような民族誌的記述の方法を見いだすということになるだろう。ここで想定されているのは、ティム・インゴルドらが biosocial becomings ということばで提示した人間の存在の仕方である（Ingold and Palsson eds. 2013）。問いの中心に置かれるのは、多様な環境との相互作用のもとで生成する人間が、その過程においてどのようにして生きる価値を成就させるのかという関心である。

## 参考文献

- 西真如 2017 「公衆衛生の知識と治療のシズンシップ—HIV 流行下のエチオピア社会を生きる」『文化人類学』81(4): 651-669。  
ベイトソン, G. 2000 『精神の生態学』第2版, 佐藤良明訳, 東京: 新思索社。  
Ingold, T. and G. Palsson (eds.) 2013 *Biosocial Becomings: Integrating Social and Biological Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.  
Samuel, G. 2002 Book Reviews: The Other Side of Rationality: Desire in the Social System. *Public Organization Review* 2(4): 415-427.

## 参考 URL

- Merriam-Webster Dictionary <https://www.merriam-webster.com> (2019年11月24日閲覧)